

SEPTEMBER 2000 TRIBUTE: 30 YEARS ON

JIMI HENDRIX

WARNER BROS. presents

"JIMI HENDRIX" a JOE BOYD • JOHN HEAD • GARY WEIS production associate producer LEO BRANTON film editor PETER COLBERT
assembled by JOE BOYD - producer JOHN HEAD - research GARY WEIS - visuals
assistant editor RANDY ROBERTS interviews filmed by SEA FILMS

Distributed by CABLE HOGUE CO., LTD. 



JIMI HENDRIX

1973年/アメリカ/カラー/102min/35mmVHSサイズ

出演：ジミ・ヘンドリックス
リトル・リチャード
エリック・クラプトン
ミック・ジャガー
ルー・リード
ビート・タウンゼント他
配給：ケイフルホーク

彼はイギリスの音楽家たちに絶大な影響を与えた。誰もが彼を好きだった。同時に嫉妬してたのだ。だから論議のまよになったが最後にはみんなと和解した。音楽シーンを一変させた。-エリック・クラプトン
彼はビートルズよりロック・サウンドを変えたとする。ジミはギター・サウンドに大変革をもたらした。-ビート・タウンゼント(ザ・フー)

2000年、9月18日。

天才ギタリスト、ジミ・ヘンドリックスがこの世を去って、30年を迎える。

ジミヘンを越えるオリジナリティ溢れたギタリストは、彼が去った今も現れることはないだろう。

ジミ・ヘンドリックスの音楽と存在

2000年夏 大鷹俊一

ジミ・ヘンドリックスが死んでから30年が経過する。

しかし彼ほどアーティストとして喪失感を感じさせない人はいなかったんじゃないだろうか。というのも死と同時に始まった未発表音源発掘、ライブ盤、未発表映像、新編集盤などの大量リリースが、ファンを走らせ続けてきた。とにかく手を変え品を変えて無尽蔵とも思えるほどアルバムが発表され続け、善悪とりませ話も絶えることなく出て、一喜一憂しながらもジミと共に時代を過ごしてきた気がしている。

ジミが生きてオーヴァー・グラウンドで活動していたわずかな期間のことを思い出してみれば、あまりの情報の少なさと未成熟な音楽シーンのせいもあり、その真面目は何百分の一も理解されていなかったと思う(とくに日本では)。しかし時代が進み、彼の存在がすべて、そして夢想した音楽が、一つの時代や流行の中で終わるものではなく、現代のポピュラー音楽の本質的な生命力と通底するものであることが明らかになってきた。まさしく彼の音楽も存在も多少しも眠らず、影を薄めることもなく生き続けているのだ。と、こうして書いている間も部屋では30周年にちなんで発表される4枚組ボックス「ザ・ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンス〜アンリリースト&レア・マスターズ」が鳴り響き続けている。音源の守護聖人と化したエティ・クレイマーの腕によりをかけたミックスによって響きわたるサウンドは、大げさじゃなく、彼が今、そこで弾いているように感じさせ「俺の音楽は死んじやないぜ」というジミの言葉が聞こえてくるようだ。

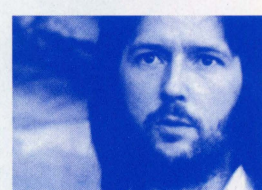
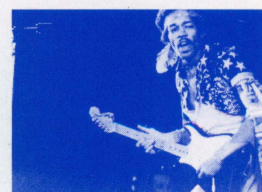
そうして考えてみると、現在我々はじつに鬱沢にジミを楽しんでいるわけだ(不在はもちろん何よりも悲しいのだが)。振り返ってみれば、ジミの死亡記事が実際に雑誌に載った頃って、動くジミ・ヘンドリックスってロクに見れていなかったと思う。「ウッドストック」の映画くらいのもだったんじゃないだろうか。モニターだってパーカーだってワイド島だって、すべて活字と写真の中であったし、モニターで

の「ストラト生け鱈」の儀式も何やら非現実な感じしたもの。とにかく僕らはジミヘンに飢えていた。そんな時代に、もっとも見たかったのがこのフィルムである。これはジミの死後3年目の1973年にワーナー映画が製作したもの。当時日本では公開もされなかったし、自主上映が何度あったただけだと記憶している。しかし面白いことに30年という年月は、このフィルムの意味を大きく変えた。確かにここに収録されているライブ映像のほとんどが、今では簡単に観る事ができる。それどころかきちんとフル・ステージを楽しめるわけだから資料としての価値では比較にはならない。

しかしそれでもこのフィルムが圧倒的に素晴らしいのは、ここに詰まっている「時代感」だ。家族、友人、ガールフレンドのコメントは、事件がまだ非常に生々しい頃だけに「へんな言い方なのだが」コメントが生き活きとしているのだ。ジミの不在、突然の別れと音楽をリスペクトする気持ちが混沌としながら、素直な言葉として語られている。それは年月が積み重ねられ、音楽神として崇められ、また音楽の偉大さと実像が複雑にリンクし合い、何倍にも膨らんでいくものとは違って、ジミという一人の男を身近に連れてきてくれる。

ミック・ジャガー、エリック・クラプトン、ビート・タウンゼント、ルー・リード、みんな若い。そしてコメントもまた同士を失った悲しみと、その才能への敬意が痛いほど伝わってくるし、彼らがこのフィルム以降に残してきた音楽的に多彩な成果のことを考えると、つくづくジミの30代40代を眺めたかったと思えてならないのだが、その分は現在も進行中のさまざまなジミ関連プロジェクトが少しは癒してくれている。

ただジミが走り抜け、生き急いだ60年代後半から70年の空気が詰まっているのはこのフィルムだけだ。そういう意味で今後、どんなに豪華で立派なジミのフィルムが作られようとも、まずこの作品「ジミ・ヘンドリックス」があたりきというものは永遠に変わらぬ。嬉しい劇場公開、たっぷりジミを感じたい。



没後30年追悼 限定4CDボックス 9/20 On Sale!

全56曲収録! 46曲が未発表&10曲は廃盤音源のリマスター!

ザ・ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンス 〜アンリリースト&レア・マスターズ

UCY-7001~4 税抜価格¥8,200
ユニバーサル インターナショナル

〜ジミ・ヘンドリックス、28年の軌跡〜

1月6日(土)〜19日(金)

レイトショー (pm 8:20〜1回上映)

特別前売鑑賞券1400円にて好評発売中!!(当日一般1700円の処)



ホワイトヒル 梅田泉の広場M-10右とがる東へ5分
扇町ミュージアムスクエア
☎06・6361・0088 www.oms.gr.jp